



著者インタビュー

『異端の時代』

——正統のかたちを求めて』
現代に正統は復権しうるか

広坂朋信「インタビュー」文

森本あんり

前 著『反知性主義』（新潮選書）

で反知性主義的風潮に鋭く斬り込んだ神学・宗教学者が、「正統と異端」をキーワードに反知性主義の背景とその行く末を展望した。

本書は、政治学者・丸山眞男の正統論の読み直しから始まる。丸山は正統のあり方を「L正統」と「O正統」に分けた。L正統とは、いわば「血統による正統性」。O正統とは「教義・世界観を中核とするようなオーソドクシー問題」のことで、「規範的な正統性」である。

「丸山は政治と宗教の絡みをよく理解した人です。図式化もとても上手で『L正統』と『O正統』は考える道具としてよい発明だと思います。た

だし、歴史をよく見ていくと、そんなに単純な図式ではうまくいかない。特にキリスト教における正統と異端は、丸山の想定とは違う成立過程を辿りました」

丸山の図式の難点を超える視点として著者が示すのは、「正統と異端の生態学」である。本書の前半はキリスト教史を題材に異端が正統を生み出すダイナミズムを描き出す。マルキオン、オリゲネス、ペラギウスといった、門外漢には怪獣の名前としか思えない人名が登場して面食らうが、実はこの歴史叙述こそ著者のいう「正統と異端の生態学」の実例となっている。それは異端によって生じた不均衡状態からバランスを取

り戻す歴史なのである。

「普通の考え方だ

と、まず正統

派が権力を

握り、批判

者や少数派

に異端のラベ

ルを貼って弾圧

するというイメ

ジだろうと思いま

す。ベストセラーに

なった『ダ・ヴィンチ・

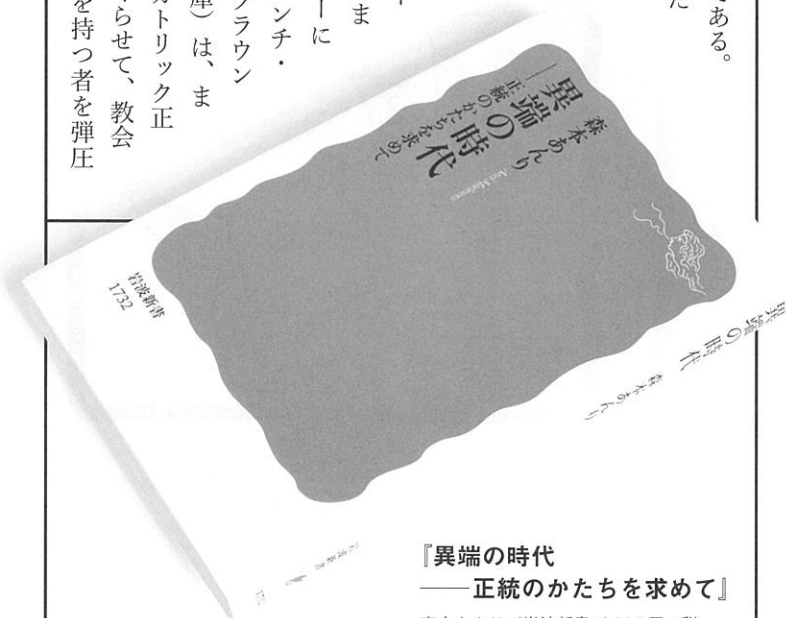
コード』（ダン・ブラウン

著、邦訳角川文庫）は、ま

さにそうした、カトリック正

統派が陰謀をめぐらせて、教会

に不都合な信仰を持つ者を弾圧



『異端の時代』

——正統のかたちを求めて』

森本あんり／岩波新書／860円＋税

する話でした。でもそれは、中世以降の権力機構化した時代のこと、少なくとも成立の歴史を見る限り、史実とは違います。そのことを前半部で、歴史に即して裏付けたいつもりです」

では、現代人の多くがこうした政治や宗教の陰謀論に魅せられてしまっているのはなぜか。

「人間は金だけでは動かない。金だけで自分の人生が満たされるとは誰も思っていない。では、何が欲しいのか。自分のいる世界をわかりやすく理解したい。つまり『納得感』です。陰謀論は世界を極めてわかりやすく説明してくれます。我々はいろいろな問題を抱えている。それら

は見たところは別々の問題であるように見える。『どうしてこんなことになるんだ』と、思っているところに、陰謀論は『実は、あれとこれとは繋がっている、密かな陰謀でこうなっているんだ』というわかりやすい世界観を提供してくれる。そういう『世界認識の方法』は、すごく魅力的なんです」

陰謀論に対して、著者の提唱している「正統と異端の生態学」は、その対極にある。何が正統で、何が異端であるかは、一握りの人たちが決めているのではない。何が正統かをめぐらせるべき歴史を経て浸透した、多くの人々が無意識に共有する前提である。そのことを著者はア

メリカの宗教社会学者、ピーター・バーガーの言葉を借りて、「信憑性構造」と呼ぶ。

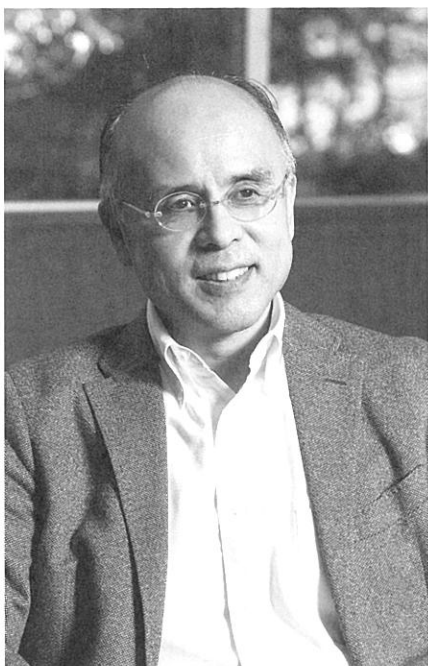
「信憑性構造とは、誰もが当然だと思っていて疑われないシステムのことです。たとえば、電車に乗る時には交通系ICカードをタッチして、いくら取られるか。誰もそんなことをわざわざ細かくチェックしないでしょう。実は鉄道会社が一回につき一銭ずつ密かにかすめ取っているのでは？ などと疑い始めたら、安心して電車に乗っていられません。我々は数々の信頼の上に社会生活を営んでいる。その信憑性構造が薄くなればなるほど疑わなければいけないことが増えてきて、生きづらい社会になる。正統があちこちで疑われていると、本当に住みにくい社会になります」

正統とは権威とも言い換えられる。職場で部下が思いどおりに動いてくれない、家庭で子どもが言うことを聞いてくれない、そんな時に上司の権威、親の権威がないがしろにされたと感じる人もいるだろう。かといって権威をかさに着れば、「権威主義」と嫌われてしまう。どうしたらいいのだろうか。

「実は、権威はかさに着ることができません。権威とは、おのずから備わっている。もので、誰もが知らず知らずのうちに、それは当然だと納得するものです。ところが、権威がない人ほど権力に頼ってしまう。『俺が上司だから（親だから、教師だから：etc.）、俺の言うことを聞け』というのは権力を振りかざしているのです。その力は肩書や地位に付随しているもので、権威とは質的に全く違うものです。地位や肩書はあるけれども権威の備わっていない人が、権威のある人のまねをする」と赤っ恥をかくことになりました」

おのずから備わり、誰もが納得する権威、それが正統というものが、現代は正統の衰弱した時代だという。「異端も、やがては古い正統にとつて代わろうという気概のない『なんちゃって異端』ばかりです。これでは正統と異端がせめぎ合って新たな正統を生み出すダイナミズムが働きます。本書の終章で真正の異端への期待を述べていますが、それも正統の復権のためなのです」

我々は次世代にいかなる正統、または異端を遺すことができるのだろうか。



もりもと あんり 神学・宗教学者。1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学（ICU）学務副学長、同教授（神学、宗教学）。プリンストン神学大学院博士課程修了（Ph.D.）後、国際基督教大学教授を経て現職。著書に『反知性主義』（新潮選書）、『宗教国家アメリカのふしぎな論理』（NHK出版新書）など。